

# 牧野富太郎の「疎開日記」

## — 解説と翻刻 —

田中 純子・伊藤 千恵  
練馬区立牧野記念庭園記念館

### はじめに

植物分類学者牧野富太郎(1862-1957)は、若い頃から晩年に至るまで日記を付けていた。高知県立牧野植物園に保管されているそれらの日記を活字に起こし、牧野が所持した標本の採集年や地名、書簡、雑誌に掲載した記事などの情報を加えて出版されたものが、山本正江、田中伸幸編『牧野富太郎植物採集行動録・明治・大正篇』(2004)と『同・昭和篇』(2005)である。これら2冊は、牧野の長い人生について記録情報が有る限りその日その日の行動を知ることができる文献である。

さて、練馬区立牧野記念庭園と園内にある記念館は、高知県立牧野植物園や首都大学東京の牧野標本館とともに1958年に開園・開館したが、記念館建て直しのために一時閉館し、2010年にリニューアルオープンした。その際牧野のご遺族から、ご自宅などに遺されていた牧野に関連する資料をお預かりし、調査を進めると共に記念館での企画展に活用させていただいている。それらの資料中に、備忘日記と印字された表紙に「疎開日記」と書かれた紙片を貼り付けたノート(図1)が含まれていた。『牧野富太郎植物採集行動録』では、1945(昭和20)年つ

まり太平洋戦争終結の年の5月12日に「鈴木氏来, 出発」と書かれた後が記されておらず、その続きがこの日記であることが判明した。したがって、本稿にて「疎開日記」の概要と日記に登場する植物などの解説および翻刻を掲載する(翻刻と概要を田中が、植物に関連する解説を伊藤が担当)。

### 1 日記の概要

最初に「疎開日記」の構成に言及する。ノートのサイズは縦16cm、横10cm。青線の枠と罫のある用紙が128ページ、そのうち17ページまで記述があり、後は白紙。最後のページに、クララに関する英語の記載文が記される(日付は5月14日)。真ん中辺りのページにコゴメヤナギの枝先が挟まれてある。それは、芽吹いて間もない枝先を6.5cmの長さで採取したもので、葉や枝など全体に白い毛がある。葉の長さは2-4cm、幅0.2-0.6cmで葉の縁は内側に巻きこむものもあり、葉の裏面は白色を帯びる特徴が見られた。日記の見返しには、向かって右側に「山梨県庁内食糧増産課技師」2名と「蒔絵筆製造人」の名がメモされ、左側には「疎開日記」という見出しと「牧野富太郎 八十四歳」が記される。また、裏の見返しには処方箋が貼り付けられ、その裏にはオオニシキソウの記載があるが斜線で消されてある。処方箋は、1945年8月22日に穂坂村の医師横森久重郎が処方したもので、薬の名称とその量、服用の仕方が書かれる。

処方箋に関して水上元氏のご教示によれば、処方1のうち、硝蒼、タンカーゼ、タンナルビン、阿片散はいずれも下痢の治療(止瀉・整腸)に用いられる医薬品で、サロールは抗菌薬である。大黃は教科書的には緩下作用(便秘の治療)作用があるとされているが、最近になって下痢止めとしての効果もあることが明らかにされ、全体として腸の機能をバランスよく整える生薬であると考えられるようになっている。処方1は、細菌によって引き起こされた(食中毒性の)下痢の治療を目的として投与されたのではないだろうか。処方2のうち、安那加は頭



図1. 「疎開日記」表紙 1945年. 個人蔵

痛や疲労感・倦怠感の治療に、チウレチンは抗炎症薬として、ジギタリス葉末は心不全の治療に、ビスラーゼはビタミンB<sub>2</sub>欠乏による口内炎の治療のほかに、代謝賦活薬として消耗性疾患などに用いられてきた。処方2は、ひどい下痢を起こして消耗した体力の回復を目的として投与されたものであろう。結論として、牧野博士は昭和20年の夏の時期に、おそらく食中毒によるものと思われる下痢を発症し、全身状態も低下したために、横森医師はこれらの医薬品を処方したのであろう。

次に日記の内容について述べる。1ページ目(図2)の上段に大きな字で「疎開決行」とあり、牧野の強い決意を感じさせる。続いて「昭和20年5月12日」の日付と、牧野が先に出発し、娘の香代と鶴代は遅れることが記される。下段は、空襲の危険に瀕したため疎開を決意したこと、家の始末、及び12日の行動を記録。その日、いけばな作家で東京植物同好会(現牧野植物同好会)の鈴木理藻が手伝いに来て、牧野は孫の澄子と同好会の川村かう(1910-2011)の3人で大泉学園駅を出発。疎開先は、甲州北巨摩郡穂坂村宮久保(現山梨県韮崎市穂坂町宮久保, 図3)。新宿駅で汽車に乗り翌13日韮崎駅で下車。出迎いの同好会の笠原基知治(1914-2012)と東京帝国大学(現東京大学, 以下帝大)の研究分室の3名が牧野をリヤカーに乗せ、皆で押して疎開先の横山保義の家に到着した。

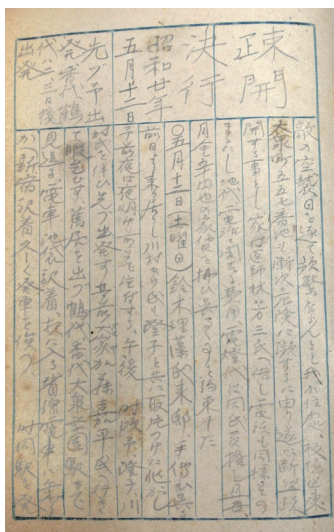


図2. 『疎開日記』1ページ。個人蔵

そこで、横森家にすでに疎開していた細胞遺伝学者藤井健次郎(1866-1952)と再会を喜んだ(大場編2007a)。藤井とは、2人が勤務した帝大において旧知の仲であった。両家の親密な交流が日記からうかがわれる。藤井家

から牧野家へ蕎麦切・うどんなどの食料が届けられたり、牧野が体調を崩した時には、藤井より干ゲンノショウコやアスピリンをもらったりしている。藤井が牧野に返却した書物は、19世紀後半に出版されたオーストリアの植物図鑑で、乾燥させた植物を型にとり印刷する方法で作成された精巧な図を収録する(村田2015)。高知県立牧野植物園編『牧野文庫蔵書目録(洋書の部)』(1981)に、この書名がある。

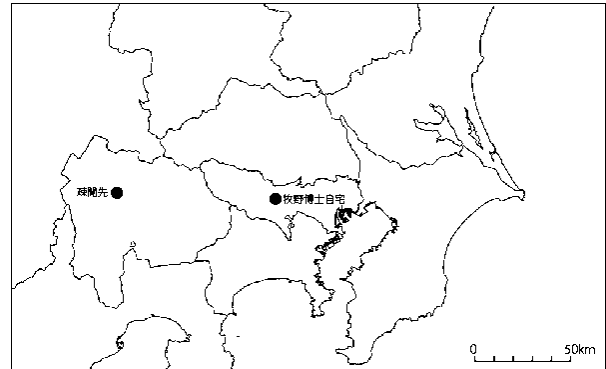


図3. 疎開先の位置図

15日に川村は帰り、遅れていた香代と鶴代は17日に着いた。疎開中、鶴代や澄子は塩崎村(現山梨県甲斐市)にある帝大の分室を訪ね、東京を行き来している。また、多数の荷物が分室と大泉より到着した。それらの収納のためか、長引くかもしれない疎開のためか、家の見分にも出掛けている。

疎開先での生活は、牧野にとって散歩と植物採集・記載が日課であった。採集した植物(後述)のうち、クララは先述のように記載文があり、また蛆の退治のためクララを厠に入れることを試みているが効き目は疑問としている。クララの記載文からは、植物体の生え方から細部の毛の様子、その味に至るまで記されており、丹念な観察を経て書かれていることがわかる。9月に笠原よりコイケマの根をもらったと記述がある。記念館には「昭和20年秋 甲州北巨摩郡(空欄)村」と記されたコイケマの図(図4)が保管される。それは、蓇葖(袋果)を描いた図で、採集地の村名が分からなかったであろう、空欄である。コイケマの隣にはテウチグルミ(カシグルミ)の冬芽が描かれる。採集地は甲州北巨摩郡穂坂村宮久保。また、方言の記録も大事な日課であった(後述)。様々な人から便りが届き、牧野も書状・葉書を認めている。帝大教授で塩崎村に疎開していた遺伝学者篠遠喜人(1895-1989)(大場編2007b)や篠遠のもとで研究し同様



に疎開していた笠原（笠原 2008）ら、牧野を訪ねて来る人も多かった。学生の頃から牧野と交流のある篠遠は牧野の疎開先を斡旋した人物である（後述）。疎開して1週間ぐらいから、下痢や発熱の記録が続き、牧野の体調はあまり優れなかったようである（図5）。また、食用野草、シロザなどをたびたび採っていることから、厳しい食糧事情であったことが推測される。

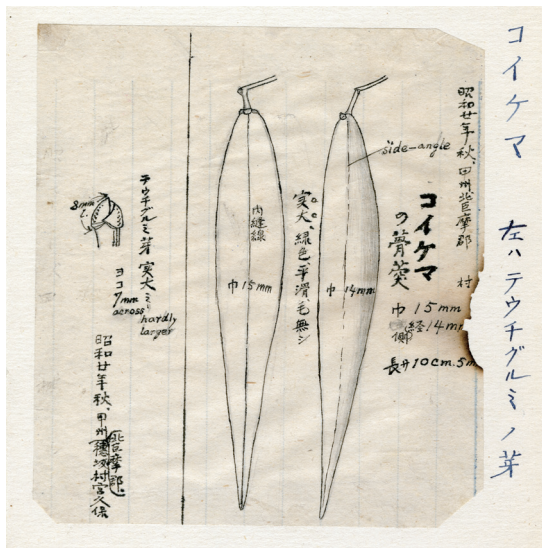


図4. コイケマ，テウチグルミの芽の図 1945年秋。個人蔵

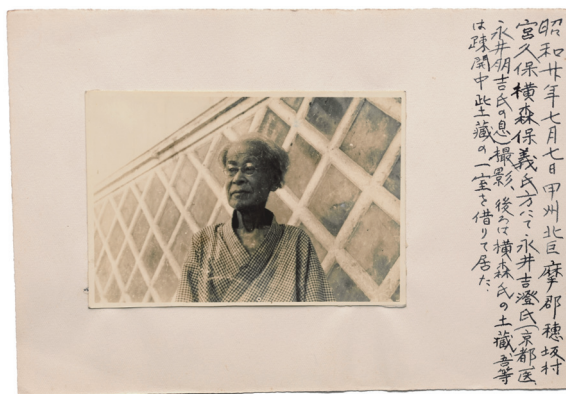


図5. 疎開先での牧野富太郎 1945年7月7日撮影。個人蔵

日記の期間は、6月29日まで月日・曜日・天気・その日の行動が記録されるが、翌30日は体温を記しただけで終わり、次に「此間記事を怠り記せず了」とある。再開されたのは終戦日を経た9月であるが日にちの記載が無い。最後は「九月廿（空欄）日（晴）」。牧野の自叙伝に載る「牧野富太郎博士年譜」では、10月24日に「帰京」とある（牧野富太郎 1956a）。

## 2 疎開に関連する資料の紹介

### ① 疎開の経緯

自宅が爆撃による危険に瀕したため牧野一家が疎開を断行したことは日記の内容から分かるが、山梨県の穂坂村をどのような経緯で疎開先としたのであろうか。

鶴代は、牧野の自叙伝のなかで「父の素顔」として、様々な思い出を短文にまとめている。その一つに「疎開」という見出しのものがある（牧野 1956）。それには、爆弾がほとんど毎日落とされるようになって、防空壕に父を連れて行く大変さ、疎開する必要は無いといって頑として聞き入れない牧野、爆弾が家の門のところ落ちてついに牧野も疎開する気持ちになったことが記される。疎開先については、穂坂村の「横森さんという、昔村長をしていらした方—篠遠喜人さんの奥様のご親戚にあたる方が蚕をつくっていらっしゃった蔵に疎開した」とある。疎開先にて牧野は、毎日リング箱二つ並べた机で書き物に余念の無い生活を送ったこと、だんだん栄養失調になり体中むくみがでたこと、10月20日すぎに大泉に戻った途端にからだがよくなったことも記される。牧野が一番必要とする書籍は帝大の荷物と一緒に運んで貰ったということである。東京大学の記録には、篠遠の担当していた「遺伝学講座は葦崎の篠遠教授の親類の家に」疎開したとある（東京大学百年史編集委員会 1987）。日記に出てくる塩崎村の「分室」とは、この講座を指していると考えられる。

84歳の高齢で疎開を断行した牧野は体調も万全ではなく困難な生活を送ったことは十分推し測られるが、一方で篠遠をはじめ、笠原、川村、鈴木および牧野の家族らの尽力によって牧野は無事に疎開し、再び家に戻ることができた。また、家に残してきた数多の蔵書の保全について東京で東奔西走した人物がいた。それは、『実録園芸』の主幹石井勇義（1892-1953）である。彼に宛てた書簡（1945年10月16日付）のなかで、牧野は、石井の尽力に対し「他人では出来ぬ事と其篤き御友情に対しては万（筆者注：満）腔の感謝を捧げ居ります」と述べている。

### ② 方言ノート

先述したように方言の記入が疎開中の牧野の日課であった。方言に関する資料が記念館に保管される。それは、5冊からなる、方言をアイウエオ順に書き込んだノートである。各冊の表紙には牧野の筆跡で「方言ノート」

および方言を記入した年が記され、1冊目の表紙は「大正9年(1920)記入」、5冊目は「昭和20年(1945)記入」とある(図6)。内容は収集した方言、採録地、共通語、注記である。5冊目には疎開先の穂坂村の名が散見する。

牧野は、自叙伝に収載の「植物方言の蒐集」において、1920(大正9)年頃から日本各地の植物方言を集め記録し、自身の努力と協力者の尽力によりそれらがかなりの数になり、早晚本として出版したいと述べている(牧野1956b)。この文を執筆した時期は、1920年頃を凡そ28年前としていることから、疎開から戻った後の1948年頃であろう。そして、方言は、「民衆が植物の実物に就て実際に呼んでいる名であるのだから、其点から観ても民衆が其れに注意を向けて其れだけ知識を働かせている証拠になる。故に方言が沢山にあればあるほど其国の民俗文化の度が進んで」いるとして、方言調査の重要性を唱えた。

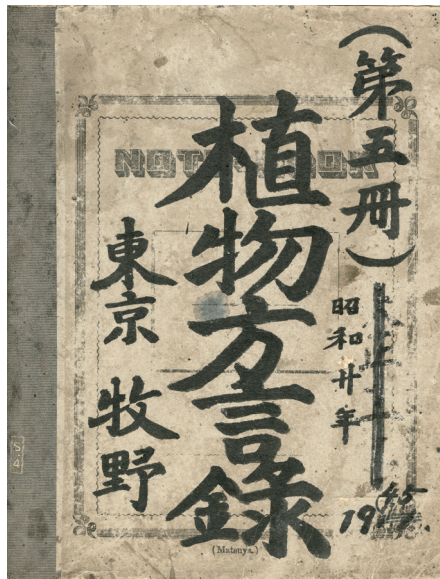


図6. 植物方言録(第5冊)1945年。個人蔵

### ③ 疎開先で採集した標本

日記内にはいくつかの植物名が登場する。そのため、それらが標本として採集されていないかを首都大学東京牧野標本館で調べ、ヒガンハギ(図7, MAK241746)を採集していることを確認した。ヒガンハギは、牧野が特に呼んでいた和名(牧野1956c)で、現在ではツクシハギという和名が一般的でありヒガンハギは異名とされる。日本固有種で、本州・四国・九州に分布し、丘陵地から山地に生育する(大橋2016)。標本には「秋1945甲州北

巨摩郡穂坂村 ヒガンハギの実、一種の笹、紫這メドハギ」との牧野自筆のラベルも貼付されている。ヒガンハギは大泉で採集されている標本が多く残されており、1943年関西より移植と書かれた標本(MAK49296)、1944年摂津長尾村より移植と書かれた標本(MAK49297)があることから、疎開以前より他地域から大泉の自庭に牧野が植栽していたことがわかる。また、1945年10月24日に疎開から大泉へ帰った後の10月29日にも大泉で果実のついたヒガンハギの標本(MAK290321)を採集している。さらに、1946年9月11日に採集した標本には「大泉 甲斐穂坂村移植」と書かれた標本(MAK290320)があり、牧野(1956c)では「私は先年山梨県、北多摩郡の穂坂村(此地のハギは皆此種)から、其苗を東京の東大泉町の自庭に、移し植えた」との記載があることから、疎開先から持ち帰り移植していることがわかる。

その他の標本としては、伊藤(1974)より1945年にはシダ植物の標本を採集していないことが報告されていることから、顕花植物を対象に疎開先で採集した標本を同標本館で調べたところ、果穂をつけたオノオレカンバ(MAK42659)、果実をつけたツルウメモドキ(MAK191039)を採集していることも確認した。2点とも果期から、日記に記入された5月に採集した植物には該当しないが、日記に記入せずとも日々植物を採集していたことがうかがえる。



図7. ツクシハギの腊葉標本。首都大学東京牧野標本館蔵



## おわりに

牧野の「疎開日記」は2ヶ月余りの短い記録である。牧野や彼を取り巻く人々にとって戦争末期の大変困難な時期であったが、植物採集・方言の記録など自分の道を揺るぐことなく歩む牧野の姿に心打たれる。疎開を決めた牧野が郷里佐川の友人吉永虎馬にその旨を知らせる手紙(1945年4月7日付)のなかで、「自然にある植物を相手として、学問の為め、国家の為め、研究しおけば、決してたゞの殺潰しではありません」と記している(松岡2017)。植物学者としての牧野の確固たる信念が感じられる文である。

## 謝辞

本研究をするにあたり、牧野一淳氏には資料を調査することに快諾いただきました。コゴメヤナギの同定につきましては、南浜野生植物調査室長谷川義人氏にご助言をいただきました。処方箋の解読及び解説につきましては、高知県立牧野植物園園長水上元氏、名古屋市立大学教授鈴木匡氏及び金城学院大学客員研究員河村典久氏にご教示をいただきました。標本を調査するにあたっては、首都大学東京牧野標本館准教授菅原敬氏、持田幸良氏、山本正江氏に多大なるご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。最後に、本投稿にあたっては、編集委員の皆様にご機会を与えてくださいましたことに感謝いたします。

## 引用文献

伊藤洋. 1974. 標本ラベルから逆にたどった牧野富太郎博士の採集年表. 植物研究雑誌 49: 285-288.  
大場秀章(編). 2007a. 藤井健次郎 植物文化人物事典

江戸から近現代・植物に魅せられた人々. pp. 433-434. 日外アソシエーツ.

大場秀章(編). 2007b. 篠遠喜人 植物文化人物事典-江戸から近現代・植物に魅せられた人々. pp. 250-251. 日外アソシエーツ.

大橋広好. 2016. マメ科. 改訂新版日本の野生植物 2 イネ科～イラクサ科. p. 278. 平凡社.

笠原基知治. 2008. 斑入り植物のはなしなぜ、一本の木から違う花が咲くのか. 180 pp. 斑入り植物友の会.

高知県立牧野植物園(編). 1981. 牧野文庫蔵書目録(洋書の部). 199 pp. 高知県立牧野植物園.

東京大学百年史編集委員会(編). 1987. 東京大学百年史 部局史二. p. 547. 東京大学出版会.

牧野鶴代. 1956. 疎開(父の素顔) 牧野富太郎自叙伝. pp. 243-246. 長嶋書房.

牧野富太郎. 1956a. 牧野富太郎博士年譜 牧野富太郎自叙伝. p. 273. 長嶋書房.

牧野富太郎. 1956b. 植物方言の蒐集 牧野富太郎自叙伝. pp. 220-222. 長嶋書房.

牧野富太郎. 1956c. ヒガンハギの花. 牧野植物一家言. p. 83. 北隆館.

松岡司. 2017. 牧野富太郎 通信-知らざれる実像-. p. 207. トンボ出版.

村田稔. 2015. 大原孫三郎が開いた図書館. 岡山大学附属図書館報 楷.no. 60: 5-6.

山本正江・田中伸幸(編). 2004. 牧野富太郎植物採集行動録・明治・大正篇. 200 pp. 高知県立牧野植物園.

山本正江・田中伸幸(編). 2005. 牧野富太郎植物採集行動録・昭和篇. 208 pp. 高知県立牧野植物園.

\*\*\*\*\*

## 翻刻凡例

- ・原文にある旧漢字は通行の字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いにそれぞれ改めた。
- ・読点は原文のままである。
- ・□は、原文の空欄を示す。
- ・[ ]は翻刻者の注記である。

\*\*\*\*\*

[表紙:] 疎開日記

[見返し: 右]

山梨県庁内食糧増産課

技師 鈴木武雄属

菊島 一属

滋賀県蒲生郡南比都佐村上駒月 [現滋賀県蒲生郡日野町] 村田久郎兵衛

○蒔絵筆製造人

[見返し: 左]

牧野富太郎 八十四歳

疎開日記

[1 ページ]

疎開決行 昭和20年5月12日 先ヅ予出発、香代、鶴代ハ二、三日後出発  
敵の空襲日を遂って頻繁ならんとも我が住処、板橋区東  
大泉町五五七番地も漸次危険に瀕するに由り遂に断然疎  
開する事とし、家は医師林芳三氏へ借し電話も同様その  
ままにし地代、電話ニ関する費用、電燈代に同氏負担し且毎  
月金五十円也の家賃を払い呉る事を約束した

○五月十二日(土曜日) 鈴木理藻氏来邸、手伝い呉る  
前日より来り居りし川村カウ氏も澄子と共に取片つけに忙がし  
予前夜は夜明け前まで片付する、午後□時頃予、澄子、川  
村氏を伴い先ず出発す其前<sup>オホキ</sup>大家加藤嘉平氏へ行き  
て暇乞いす、旧居を出づ鶴代、香代大泉学園駅まで  
見送る、電車池袋駅着、夜に入る、省線電車に乗り  
かえ新宿駅着久しく発車を待つ、□時同駅を發  
車す、車中は乗客にて動き取れなく充滿す、又携帯の荷物  
多し、汽車は無事に進行せり  
○五月十三日(日曜日) 汽車は無事に進行をつづけ夜將に明け  
んとする頃山梨県甲府駅に着す、此汽車は韮崎駅に停まらざ  
るを以て此甲府駅にて下車す、此駅にて久しく次の汽車の到着を待つ、  
程なく新宿発の汽車来り乃ち之れに乗り換ゆ、夜明け早朝韮崎  
駅に無事到着す、下車し駅長に挨拶し八王子駅乗越しの汽  
車賃を払い、少時して笠原基知治氏、大学研究分室の□ [3人の名を入れるための空欄]  
の三氏迎へに来らる、幸に駅にて辛うじて備い得しりやかーに乗  
り又荷物を載せ同駅を出発す、始めしばらくは平地なりしが次に坂路  
となる、笠原、□ [同上] 三氏牽引、川村、澄子之れを押し、駅より一里  
十町許にて遂に山梨県、北巨摩郡、穂坂村宮久保の横森保義氏の宅に着す、早速に  
家族の人々に初見の挨拶し土産物の印として金参拾円也の包を進  
呈す、主人は予を迎えにワザワザ駅に向われ途中にて行違いと相成り

程なく帰宅ありし故初見の挨拶をなし居室を貸与せられし礼を述ぶ、前に当家に疎開し来りし藤井健次郎氏に久しぶりにて会ひ大に相嬉ぶ、予主家の一室にて臥床し暫時休養す、定められし室を見分す、庭にて藤井氏と話し又日光浴をとる、少し近傍を歩いて見しが漸く疲労す、帰りて始めて定めめの室に入る、川村、澄子室内を整理掃除す、藤井氏よりの招きにて同氏の室（一つの離れ屋）に到り川村氏と澄子と予と藤井氏嗣子の妻君の調へし蕎麦切の馳走になり、帰りて食事す夜に入り予ハ主家の一室に寝ね川村、澄子ハ借室に休寝す、此日は気持よき晴天なりし

○五月十四日（月、晴後ち曇）朝起主家の室より借室ニ還る、昼食後川村スミ子兩人を伴い近くの山路を散歩し帰ル、採り来りしくらら（苦参）の嫩本を検シ記載す晩に藤井氏ヨリ饅頭三皿を贈らる、白紙若干甘草二本を同氏へ贈る、藤井氏は今朝早く立ちて東京に行く

○五月十五日（火、曇微雨）川村、スミ子兩人朝引き明け支度して葦崎駅に今朝着予定の鶴代一行を迎えに行く、笠原氏も駅に来る、同氏へ東京大泉鶴代ヨリの電報アリ小松氏の都合にて大泉出発ニ、三日後れるとの事、川村、スミ子兩人は笠原氏に伴れて塩崎村の分室へ行き篠遠氏夫人に会い挨拶し野菜卵を恵まれて帰り来る、小松留守の為め出発ニ三日後れる更に此方にも電報達せり、午後一時川村氏出発帰宅す、雨降りシユエ蝙蝠傘ヲ貸ス

○五月十六日（水、朝雨、午前九時半頃ヨリ晴ル）鶴代等今日朝五時葦崎着ノ電報午後一時半ニ着ク、スミ子早速ニ駅ニ行ク、来テ居ラズ、空シク帰宿シ、若シヤト思ヒ塩崎村駒沢ニ行キ見シニ矢張り来居ラズ空ク帰宿ス既ニ夜ニ入ル、主家ニテ夕食トシテ蕎麦切ノ馳走ニ預ル、帰り方言ノ書入レヲナシ十一時過ぎ就寝ス

○五月十七日（木、午前曇り後チ晴レ日光サス）朝鶴代香代葦崎駅到着、二人ニテ横森氏ノ宿ニ無地着ス、昼食後近傍ノ山路ヲ散歩、採り来リシ植物ヲ記載ス、晩ニ方言記入ヲナス、鶴代、スミ子葦崎駅へ荷物ヲ取りニ行キ荷馬車ニテ荷物着ス

[上段枠外] 山下助四郎、星薬学専門学校ヨリノ書信到着ス

○五月十八日（金曜日、晴）昼食後近傍ヲ散歩ス、採り来リシニ、三ノ樹ヲ記載ス、又方言記入ヲナス、塩崎大学分室より荷物五個届ケ来ル

○五月十九日（土、曇天、微雨 [ ]）鶴代、澄子兩人塩崎駒沢の篠遠喜人君の大学分室ニ行キ夕刻帰宿ス

○五月二十日（日曜日、曇天）本家主人案内ニテ藤井健次郎君ト地面ノ見分ニ行ク、此日川田豊太郎氏、高橋新太郎氏、宮内長次氏、鯛天怡子氏ノ書信到着、鯛天怡子氏ハ夫鯛天源三郎氏ガ五月一日病死ノ由ヲ報ジ来ル、笠原基知治氏来訪、山中省二氏ノ書状来リ通勤証ヲ送ラル、久シ振りニテ入浴ス、方言記入、就寝午前一時頃ナリ

○五月二十一日（月曜、曇天）

清水藤太郎，落合ギン（阪庭清一郎氏死去ノ報），山本守三三氏ヨリ  
ノ葉書着，方言記入，東京携帯ノ植物生本ヲ庭ニ植ウル，発送スベキ  
葉書十二枚認タム，少々腹痛み下痢の気あり

○五月二十二日（火，曇天）

鶴代，澄子兩名東京ヘ行ク，方言記入ヲナス，藤井君ヨリ  
干ゲンノショウコを贈らる，下痢の気味ヤ、ヨシ

○五月二十三日（水，晴）

塩崎分室ヨリ篠遠氏等数人見えらる

○五月二十四日（木，□□）

○五月二十五日（金，晴）

昼食後附近ヲ散歩ス，食用野草ヲ採り来ル，山羊乳ノ配布ヲ受ク

○五月二十六日（土，晴）

昼食後附近ヲ散歩し食用野草ヲ採り来ル，ホップ畑  
ヲ見ル，香代ヲ郵便局ニ遣ハシ書状ヲ出ス，神戸ノ西村マサ氏ヘ五  
円小為替入り書留書状ヲモ出ス

○五月二十七日（日，半曇半晴）

午後附近ヲ散歩シ若干ノ食用野草ヲ採り来ル，ヲトコメシ  
苗ヲ写生ス，新聞ハ去ル二十五日二十二時三十分頃ヨリ約二時間半ニ互  
リ敵機 B29 二百五十帝都ニ来襲，焼夷弾盲爆，宮城内表宮殿，大  
宮御所ノ炎上，都内各所相当ノ被害ヲ生セシヲ報ゼリ，又今日来リ  
シ藤井令息ノ話ニヨレバ池袋新宿間，新宿荻窪間ノ省線電車ハ  
不通，汽車ハ八王子韮崎間ハ折返シ運転トノ事ナリシ

○五月二十八日（月，晴）

藤井君ノ処ニテ蕎麦搔ノ馳走ヲ受ク，附近ヲ少シク散歩ス  
方言記入ヲナス

○五月二十九日（火，曇天）

方言記入ヲナス，午后附近ヲ散歩ス

○五月三十日（水，晴）

笠原基知治氏沢山ナ菜ヲ持ち来リ恵マル，案内ニヨリ晩ニ藤井氏  
ヘ行水ニ行ク，方言記入ヲナス

○五月三十一日（木，晴）

郵便局ニ香代ヲ遣ワシ書状ヲ出サシム，山本守三氏ヘ早速  
書留書状ヲ出ス，方言記入ヲナス

○六月一日（金，晴）

方言記入ヲナス

○六月二日（土，雨天）

方言記入ヲナス

○六月三日（日，曇天）

方言記入ヲナス，鶴代，澄子恙ガナク帰り来ル

○六月四日（月，晴天）

当地國氏学校長并ニ山梨県視学秋山樹好氏（北巨摩地方事務  
所）両氏来訪，方言記入ヲナス，此夕入浴ス



○六月五日（火，晴天）

「山梨日日新聞」本日ヨリ配達ヲ受ク，澄子荷物取りニ葦崎駅  
ニ行ク，駄馬ヲ傭イ荷物着ク，澄子郵便局ニ郵便物  
ヲ持ち行ク，山地ニテ苦參ヲ掘り根，茎，葉ヲ採り来ル  
厠ニ入レ蛆子ヲ殺サンガ為メナリ，蛆死スルカ，疑問ナリ，  
方言記入ヲナス

○六月六日（水，晴）

澄子朝早く出発東京ニ行ク，午前附近ヲ散歩シ帰りニ  
しろぎ苗ナド採り来ル，方言記入ヲナス

○六月七日（木，雨天）

鶴代家ヲ見ニ行ク葦崎町ノ西方ニ在ルー農家ニ在ルー  
家屋ヲ見テ来ル，清哲村ノ内也，方言記入ス

○六月八日（金，半曇）

新聞紙持ち来ル，方言記入ス

○六月九日（土，晴天）

附近ヲ散歩ス，方言記入ス，夜藤井氏ニ行ク

○六月十日（日，晴）

昼食後近傍ヲ散歩シハチクヲ伐り来テ杖ニ作ル，方言記入ス，本日  
東京空襲アリシト聞ク，甲府ヘモ若干ノ爆彈落ちシトイウ

○六月十一日（月，半曇半晴）

昼食後近傍散歩，淡竹ノ筍ヲ採ル時期少シ過  
ギ延ビタリ，

○六月十二日（火，曇天少雨）

方言記入，鶴代，藤井夫人ト同行塩崎分室，篠遠氏  
方ニ行ク

○六月十三日（水，晴）

笠原基知治氏来リ一宿ス

○六月十四日（木，半曇天）

篠遠喜人氏来ル，同氏辞去ノ時，笠原氏共ニ塩崎ニ帰ル

○六月十五日（金，曇）

方言記入ヲナス

○六月十六日（土，曇，少晴）

郵便局ヘ郵便物（書状）ヲ出シニ行ク，方言記入ス

○六月十七日（日，曇）

鶴代，藤井夫人ト葦崎ニ行キ植木屋ヲ尋ヌ，農会  
ノ横森祐喜氏来訪，越后カラ来タト云ウおおうばゆり  
ノ干キタルモノ一個ヲ持ち来リ質問セラレタカラ速座ニ答エ  
オキタリ，方言記入ス

○六月十八日（月，曇）

方言記入

○六月十九日（火，曇多少晴）

鶴代藤井夫人ト東京ニ行ク，方言記入，農会ノ横森祐喜氏ヨリ味噌漬ヲ贈ラル

○六月二十日（水，半晴半曇）

鈴木理藻氏ト鶴代トヘ速達ニテ書面ヲ出ス，藤井健次郎氏ヨリ Ettingshausen und Pokor[n]y, Physiotypia Plantarum Austriacarum 一冊返シ来ル，方言記入ス

○六月二十一日（木，半晴雲アリ）

方言記入，農会ノ横森祐喜氏ヨリ野菜ヲ贈ラル，日暮レテ藤井夫人東京ヨリ帰ル，魚肉ヲ贈ラル，相州三崎ノ実家ヨリ携帯セシモノナリ

○六月二十二日（金，曇）方言記入ヲナス，一軒置テ隣ノ

長谷川氏ヨリ薔薇ノ花枝ヲ贈ラル

○六月二十三日（土，半晴）

午食後附近ヲ散歩ス，方言記入ヲナス

○六月二十四日（日，雨）

京都遠藤善之氏ヨリ番茶，抹茶ノ小包郵便到着ス，誹 [俳]句ヲ書テ薔薇花ノ返礼ヲ長谷川氏ヘシタル所復タ薔薇花，ムラサキツクサ花トジャガイモトヲ恵マル，方言記入ヲナス

○六月二十五日（月，晴，雲アリ）

昼食後運動ノ為メ附近ヲ歩ク，郵便ヲ出シ香代ヲ遣ワス風邪ニテ多少発熱ス鼻涕頻リニ出ツ，隣ヨリ饅頭ヲ贈ラル又薬ヲ恵マル，藤井氏ヨリ行水ノ案内アリ香代行ク発熱三十七度五分

○六月二十六日（火，曇）

風邪ヤヤヨシ，咳夜ツトニ出ツ，終日臥来，藤井氏ヨリ薬ヲ贈ラル

○六月二十七日（水，曇）

夜分体温 38 度 9 分ニ上ル，藤井氏ヨリノアスピリンを服用し就寝ス

○六月二十八日（木，晴）

藤井氏ヨリ卵一個，トロロコブ，削り堅魚節一椀贈らる，体温 35 度 5 分ニ下ル，午后三時体温 37 度，夜に入り 37 度 2 分トナリ同十一時半ニモ同温度ナリ，嗽モ遠ノキ鼻汁ノ出ルモ少ナクナレリ，本日韭崎駅荷物係ヨリ六月二十日大泉学園発疎開荷物二十ヶ，二十四日到着セルニヨリ至急引取クレトノ 27 日附ハガキ到着セリ

○六月二十九日（金，曇）

朝七時半体温 36 度 7 分，馬力二台ヲ雇い韭崎駅ヨリ二十個ノ疎開荷物ヲ受取り来ル，午后九時体温 36 度 4 分，咳衰エシモ就寝後出ツ

○六月三十日（土曜日，夜来雨後曇 [ ]）

午前九時体温 36 度 2 分

○此間記事を怠り記せず了る

○九月  日鶴代東京へ行ク

○九月 鈴木理藻氏来訪，一泊し翌日辞去す，彼岸菘

の生根を頼む、右□日彼岸萩を押す

○九月□日笠原基知治氏来ル、コイケマ生根を採り来り

呉れたり

○九月二十□日（晴）

[途中のページ：枝先が挟み込まれる]

[最後のページ]

○クララ（苦参） 14/V/1945 Hosaka-mura, Prov. Kai.

Stems erect, caspitose\* in a few or several members, entirely glabrous, or minutely and adpressedly\* white puberulent, light green, or purple, or purpurascens light green, terete, solid, 5-11mm. across, herbaceous, more or less shining excepting the puberulent one, usually simple, very rarely ramose from the axil of the lower spatulate scales, purple at the very base in ground. 茎味甚ダ苦シ, stem loosely sparse with spatulate green or purplish green scales, pale dense or moderate ciliated on margins. Leaves cowered\* at the top of the young stem, petiole, rachis green, rarely purpurascens, appressedly pale puberulent; leaflets green and appressedly pale puberulent above, appressedly pale deme\*-pubescent beneath; rachisglabrous at base but pale appressedly pubescent above, or [entirely pale appressedly pubescent. <sup>whowly\*</sup>

[\*原文のまま]

[以下に意識を載せる]

茎は直立し、数本が叢生し、無毛か細かく白い伏毛が生え、淡緑色または紫色、または紫を帯びた淡緑色で、径 5-11 mm の中実の円柱形である。草本で毛のある部分を除きおおよそ光沢がある。たいてい枝分かれしないが、非常に稀に小さなへら状の托葉のある葉腋から枝分かれする。根本は紫色となる。茎味甚ダ苦シ。茎にはまばらに緑色または紫色の托葉があり、その縁には高密度または中程度に白い微毛がはえる。葉は若い枝の先端につき、葉柄、葉軸は緑色でまれに紫がかり、白い伏毛がある。小葉は緑色で、上面に白い伏毛があり、下面にも部分的に白い伏毛がある。小葉軸の根元は無毛で上部に白い伏毛があるか、全体に白い伏毛がある。

[裏見返しに貼り付けた紙片の表]

処方

牧野富太郎 84 歳

[処方 1]

硝蒼 2.0                      タンガーゼ 1.0

[次硝酸ビスマス]

タンナルビン 1.0              サロール 0.5

[タンニン酸アルブミン]      [サリチル酸フェニル]

阿片散 0.25                  大黃末 0.3

右 1 日量分 3 包 3 回分服食前 1 時間用

[処方 2]

安那加 0.5                      チウレチン 1.2

[安息香酸ナトリウムカフェイン]      [サリチル酸ナトリウム]

チキタリス葉末 0.2              ビスラーゼ 2.0

[ジギタリス葉末]                      [ビタミン B<sub>2</sub>]



右1日量为3包3回分服食後1時間用

昭和20年8月22日

北巨摩郡穂坂村三澤

[裏見返しに貼り付けた紙片の裏 斜線で消してある]